

体験学習スポットガイド
散策&観賞

沖縄

本島編



美しい海に囲まれた「東洋のガラパゴス」、その歴史を学び、文化を知る

国営沖縄記念公園(海洋博公園)・沖縄美ら海水族館



目次

アジアから見た沖縄	3
本島南部地図	4
本島中部地図	5
本島北部地図	6
はじめに	7
本島南部	8
ひめゆりの塔	8
ひめゆり平和祈念資料館	8
沖縄県営平和記念公園	10
沖縄県平和祈念資料館	11
沖縄平和祈念堂	11
おきなわワールド	12
旧海軍司令部壕	16
那覇市伝統工芸館	17
ガンガラーの谷	18
漫湖水鳥・湿地センター	18
首里染織館 suikara	19
首里城公園	20
対馬丸記念館	26
波上宮	26
福州園	27
識名園	28
沖縄県立博物館・美術館（おきみゅー）	28
国際通り	29
本島南部のその他名所	30
本島中部	32
アメリカンビレッジ	32
琉球大学	32
中城城跡	33
沖縄こどもの国	33
東南植物楽園	34
中村家住宅	34
勝連城跡	35
ピオスの丘	36
海中道路	36
琉球村	37
むら咲むら	38

やちむんの里	38
恩納村博物館	39
残波岬	39
万座毛	40
金武観音寺	40
ブセナ海中公園	41
座喜味城	41
ユンタンザミュージアム	42
本島中部のその他名所	43

本島北部	44
名護博物館	44
熱帯ドリームセンター	45
ネオパークオキナワ	45
沖縄美ら海水族館	46
沖縄フルーツランド	46
海洋文化館 プラネタリウム	47
芭蕉布会館	47
今帰仁城跡	48
今帰仁村歴史文化センター	48
やんばる野生生物保護センター ウフギー自然館	49
やんばる国立公園	50
ヤンバルクイナ	50
大石林山	51
東村立山と水の生活博物館	51
GODAC（国際海洋環境情報センター）	52
本島北部のその他名所	53

沖縄の植物	54
沖縄の動物	56
沖縄料理	58
沖縄の伝統工芸	60
沖縄の伝統芸能	64
沖縄の年中行事	66
見学・拝観施設一覧	68
索引	72
奥付	73



アジアから見た沖縄



1

2

3

4



はじめに

沖縄県は北緯24度から28度、東経122度から132度付近の日本の南西端位置し、県の面積は約2281km²と都道府県のなかでは44位と小さいが、南北約400km、東西約1,000kmの広大な海域を有する。県域には無人島を含めた大小160の島嶼があり、沖縄島、西表島、石垣島、宮古島など大きな島に観光やレジャーなどで毎年日本全国から旅行客が訪れる人気の観光地となっている。

県の面積		
1	北海道	78,421
2	岩手県	15,275
3	福島県	13,784
~~~~~		
43	神奈川県	2,416
44	沖縄県	2,281
45	東京都	2,191
46	大阪府	1,905
47	香川県	1,877

## 沖縄の人口(令和2年(2020)国勢調査確報値に基づく推計人口)

沖縄の人口は約146万人。前回(平成27年)から2.4%増加しており、全国でも第2位の増加率(1位は東京)。市町村別でみると、人口増加数が最も大きいのは、うるま市、次いで宜野湾市となっており、本島中部で比較的人口が増加している。出生率は昭和49年(1974)より連続全国第1位、婚姻件数は全国第2位、離婚件数は全国第1位となっている。平均寿命は平成27年(2015)の厚生労働省の調べでは男性80.27才(全国36位)、女性87.44才(全国7位)。かつて平均寿命全国1位の長寿だった沖縄県だが、米軍統治下時代の食生活の変化が一因とされている。



## 沖縄の自然・気候

沖縄は近海を黒潮が流れる暖かい海に囲まれて海洋の影響を強く受けるため、気候は高温多湿である温暖な亜熱帯の気候となっている。また、豊富な雨や乾燥した海岸などの光や湿度の多様さによって、多くの固有種を含んだ動植物が生育生息する環境となっており、日本で最も種の多様性が高い地域から「東洋のガラパゴス」とも称されている。

## 沖縄の歴史

琉球は15世紀の初めまで三山(南山、中山、北山と称する3つの勢力)が対立していたが、中山の尚巴志が北山と南山を滅ぼして統一、琉球王国を樹立した。琉球は明、東南アジア諸国、日本、朝鮮との中継貿易を行って海洋王国として発展、独立を保持した。しかし、慶長14年(1609)に薩摩藩による軍事侵攻を受け、徳川幕府の監視下に置かれた。明との貿易を重視する幕府は、征服した琉球を利用し貿易を継続、表向きは琉球王国を存続させていた。その後、明治維新により成立した日本政府によって明治12年(1879)に琉球王国は解体され、沖縄県として第一歩を踏み出したのである。



ある。しかし、太平洋戦争後27年間アメリカの統治下置かれた沖縄は、日本の米軍専用施設面積の70%が集中するなど、今日まで続く問題が山積している。



# 本島南部



那覇空港を有する南部は沖縄唯一の鉄道ゆいレールが走る観光の人気スポット。「奇跡の1マイル」と称される国際通りや食文化を継承する拠点施設である公設市場など買物や食事を楽しめる。また、首里城（再建予定）や識名園など琉球王国時代の遺跡や施設が数多く残されている。しかし、一方では太平洋戦争で激戦が行われた地でもあり、平和記念公園やひめゆりの塔など戦争の爪跡を色濃く残す地域となっており、テーマ学習としても巡りやすい場所となっている。



ひめゆり平和祈念資料館

地図 P4A・B4 P70 参照

ひめゆり学徒隊の戦争体験を伝えるため、平成元年（1989）に設立した資料館。建物は当時ひめゆり学徒隊が通っていた第一高等女学校の校舎を模したもの。

第一展示室では「ひめゆりの青春」と題し、15歳からの青春を生きた少女たちの当時の学校生活を写真とともに紹介、現代の中高生と変わらない日々を過ごしていたことを垣間見ることができる。しかし、戦争の影響で次第に学校生活が軍事化されていき、生徒たちが何の疑いもなく戦争に巻き込まれていく。ここでは教育というものがいかに大切であるかを考えさせてくれる。

第二展示室「ひめゆりの戦場」では、看護要員として動員された南風原の沖縄陸軍病院の様子が紹介されており、粗末な二段ベットを配置した手掘り洞窟のような病院壕のジオラマや、実際に使用していた医療器具、持ち物などが展示されてお



慰霊塔の前に穴があいている洞窟が沖縄陸軍病院第三外科壕跡 ©OCVB

## ひめゆりの塔 地図 P4A・B4 P70 参照

沖縄県では太平洋戦争末期の昭和20年（1945）に上陸した米軍との民間人を巻き込んだ地上戦が行われました。昭和16年（1941）、日本軍によるハワイ真珠湾への攻撃から始まった太平洋戦争は、翌年ミッドウェー海戦での日本軍の敗北を機に形成が逆転し、南太平洋上の数々の基地を奪われることとなった。このため日本軍は本土防衛の最後の拠点を沖縄として、昭和18年夏から飛行場の建設が始まり、翌年には第32軍が配備された。このとき、沖縄にあった21の中等学校から学徒が戦場に動員され、沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の生徒（ひめゆり学徒隊）は南風原の沖縄陸軍病院に派遣された。動員された生徒の数は222名にのぼる。

昭和20年3月17日硫黄島の日本軍は破られ、3月26日には米軍が慶良間諸島に上陸、4月1日には本島中部の読谷・嘉手納・北谷に上陸した。この沖縄攻略作戦（アイスバーグ作戦）に動員された米軍部隊は、太平洋戦

争で最大規模の編成である兵員約54万人、艦船約1500隻に及んだという。米軍の空襲や艦砲射撃は約3ヶ月間続き、地形が変わるほどの激しい砲弾を受けた沖縄の人々は「鉄の暴風」と名付けた。南風原の沖縄陸軍病院では前線から負傷兵が次々と運び込まれ、生徒たちが寝る暇がないほど治療や食事の準備などに追われていた。やがて病院にも砲弾が落ちるようになり、生徒の中にも死傷者がでるようになった。

昭和20年5月31日に米軍により日本軍司令部のある首里城が占領された。しかしそれ以前の22日に軍司令部は、にわか南部への撤退を決定し、さらに抵抗を続けて本土決戦を一日でも先に延ばす作戦を行っていた。陸軍病院も歩ける患者を連れ南部へ撤退したが、砲弾の中で多くの死傷者を出すことになった。生徒たちが集まった伊原周辺には「ガマ」と呼ばれる自然洞窟が多数あり、3月頃から住民などが避難生活を送っていたが、日本軍が避難民を追い出し陣地を構え、そこに陸軍病院も入った。

6月18日、陸軍病院の生徒たちに解散命令が告げられた。6月19日、脱出する日の明け方、米軍にガス弾攻撃を受けて生徒38人余りが亡くなり、助かった生徒も海岸に追いつめられ、21日、捕虜になることを恐れて手りゅう弾で自決した。動員された生徒222名のうち、123名が死亡。大半が軍の解散命令が告げられた後の戦死であった。

ひめゆりの塔は、ひめゆり学徒隊の最後の地の一つである伊原第三外科壕の上に建てられた慰霊碑。敷地内は木々が生い茂り、かつて戦場となっていたと思えないほど穏やかな場所となっている。多くの人々が訪れ平和を祈る場となっている。

沖縄戦 概略 昭和20年（1945）	
3月23日	米軍が沖縄諸島に空襲を開始する
3月26日	米軍が慶良間列島に上陸する 地上戦が始まる
4月1日	米軍が沖縄本島西海岸の読谷・嘉手納・北谷に上陸する
4月16日	米軍が伊江島に上陸する
5月31日	米軍が首里を占領する
6月13日	日本軍の海軍部隊が壊滅する
6月19日	沖縄における日本軍の組織的抵抗がほぼ終わる
6月23日	牛島第32軍司令官が糸満市摩文仁で自決する
7月2日	米軍が沖縄作戦の終了を宣言する
8月6日	広島に原爆が投下される
8月9日	長崎に原爆が投下される
8月15日	昭和天皇による玉音放送



「いはまの碑」学徒隊の引率教師だった仲根政善先生がいまはまの碑にたつたとき、すうかにねむれとぞいのるまひのともは」のうたを霊前に捧げた

り、当時の病院壕での生活や負傷兵の実態が明らかになる。

第三展示室「解散命令と死の彷徨」では、昭和20年（1945）6月18日の夜にひめゆり学徒隊に突然解散命令が出され、米軍が包囲する戦場に放り出された様子を、生存者による証言映像と米軍が記録したフィルムによって紹介。この解散命令後の数日間で100余名のひめゆり学徒が死亡している。少女たちの混乱した様子や戦争の悲惨さが伝わる展示となっている。

第四展示室の壁面には200余名の犠牲者たちの遺影がかけられ、亡くなられた人々の「鎮魂」の空間となっている。また、生存者の証言本を閲覧することができ、米軍のガス弾攻撃によって多くの犠牲者がでた伊原第三外科壕の実物大のジオラマが再現されている。

第五展示室「回想」ではひめゆり学徒の戦後の歩みを紹介。生き残った生徒たちが長い間戦争体験を語れなかったこと、それを乗り越えて資料館の開館にこぎつけたこと、その後の戦争体験を伝える活動などについて紹介。

この資料館は平和な日常を送っていた少女たちが戦場に送られ犠牲になった歴史を後世に伝えようと、生き残った同窓生が設立した。戦争の恐ろしさや悲惨さを伝えるとともに、平和であることの大切さを我々に教えてくれる場所となっている。



ひめゆりの石像（1956年建立）

©OCVB





## 今しか見学できない復元現場の見どころ

首里城がよみがえるプロセスを見てもらうことで、あらためて琉球の歴史や文化を再認識してもらいたいという思いから「見せる復興」をコンセプトに復元・修復現場を公開している。

### 木材倉庫・原寸場見学エリア

正殿前の広場「御庭」に立つ復元で使用する木材を保管・加工する木材倉庫と、倉庫内で行われる作業の様子がみられるガラス張りの見学エリア。木材を加工する際に使用する実物大の図面を描くための原寸場があり、複雑な形に加工された部材を正確に組上げることができる職人たちの伝統技術を間近で見学できるほか、パネル展示と映像で正殿復元工程の解説も行っている。



### 大龍柱補修展示室

正殿の正面階段の左右に立っていた大龍柱。火災により正殿焼失の際も、損傷はしたが奇跡的に立っていたもの。補修は完了しており、



## 首里城公園 世界遺産 地図P4B2 P69 参照

沖縄（琉球）では1429年に「琉球王国」が成立し、明治12年（1879）までの450年間、日本史でいえば室町時代から明治時代まで長きにわたって国を治めていた。首里城の創建時期は定かではないが、1427年に建立された琉球最古の石碑「安国山樹花木之記碑（安国山樹華木之記）」によると、首里城の外に人口の池（龍潭）や周囲に木や花を植え、太平の世の象徴として永遠に記念することが記されていることから首里城周辺の整備を行なったのはこの頃と思われる。歴史上、何度か火事などにより焼失を繰り返したが、近年では昭和20年（1945）の沖縄戦の米軍による攻撃、現代では令和元年（2019）の火災により焼失し、正殿については令和8年までの復元を目標に現在取り組んでいる。

しかし、首里城周辺は中国と日本の文化を融合した独特の建築様式や石組み技術を利用した遺跡があり、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の1つとして平成12年（2000）には世界遺産に登録された場所である。守礼門をはじめとするいくつもの門などの文化財は残っており、琉球王国の文化を現在に伝える。

正殿復元の際の新しい大龍柱の見本として活用される。また、大型モニターでは大龍柱の補修作業の様子も公開している。最近では大龍柱を正面向きにするか、相対向きにするかなど議論が出て話題となっている。



### 首里城復興展示室

正殿の屋根にあった獅子瓦の一部や残存する奉神門の瓦など展示公開している。黒く焼けた跡や焦げた跡がはっきりと確認でき、当時の火災の激しさを今に伝えている。またVTR「首里城 復興へのあゆみ」を上映し、火災発生から復興への始動を紹介。ほかにも首里城正殿の工事の進捗にあわせて、「木材」「瓦」「石材」「漆（塗装）」等のテーマで解説パネルや実物の素材等を展示している。



### 世誇殿（大型映像設備）

もともとは琉球王国時代、未婚の王女の日常の居室。国王が亡くなると次期国王の即位の儀礼が行われていた場所。大スクリーンで焼失前の正殿や歴史を紹介する映像を上映しており、タッチパネルでは復元される令和の首里城を3Dイメージ図で楽しむことができる。

### 女官居室（ミュージアムショップ 琉陽）

御内原で勤める女官たちの居室。現在は首里城オリジナル商品をはじめ、伝統工芸品やお土産品を取り揃えたミュージアムショップとなっており、店内外にはイートインスペースも設けられ軽食を食べながら休憩できる場所となっている。







## 守礼門

県指定有形文化財

沖縄で最も有名で広く知られたシンボルの1つとなっており、首里城の象徴的な建造物で「守礼之邦（礼節を重んじる国）」を扁額に掲げている。中国の様式を取り入れた装飾建築で、和式特有の天竺様の組物や入母屋造りの屋根になっているが、沖縄独特の赤瓦の本瓦葺にもなっており、中国・日本・沖縄の建築技術や文化を取り入れた独創的な建築物となっている。昭和33年(1958)復元

## 園比屋武御嶽石門

世界遺産

国王が城から出かける際に、ここで道中の無事を祈願したといわれる。形は門であるが、出入口としての門ではなく、いわば神への「礼拝の門」ともいうべき場所。門上部の扁額から1519年に建てられたもので琉球建築の石造建築としての意匠、構造もたくみである。石門は木製の扉を除き、主として琉球石灰岩、棟飾りなどは細粒砂岩で作られおり、屋根の垂れ木や唐破風、懸魚などが細部わたり彫り込まれた建築は見事。日本と中国の双方の様式を取り入れた琉球独自の石造建造物である。昭和32年(1957)復元



## 歓会門

「歓会」とは歓迎するという意味で、中国からの使者を歓迎するためにこの名前がつけられた。首里城郭内に入る第一の正門であり、アーチ型の石造りの門の上部に木造りのやぐらを置いた珍しい形。別名「あまへ御門」とも呼ばれており、「あまへ」は沖縄の方言で、「喜んで迎える」を意味している。門の両脇にはシーサーが置かれ、魔除けとして城を守っている。昭和49年(1974)復元

## 龍樋

龍の口から湧水が湧き出していることからこの名が付けられた。この湧水は王族のほかは中国から国賓に利用されたとされる。龍樋の周辺には冊封七碑という湧水を褒め称えた石碑が立っている。首里城が丘の上において豊富な湧水が得られたのは、丘の上部にある琉球石灰岩の層を通った雨水が、下部の水を通さない島尻泥岩にぶつかって湧き出したからである。平成4年(1992)供用開始



## 瑞泉門

歓会門の先にある2番目の門で、瑞泉とは「立派な、めでたい泉」を意味し、門の前にある龍樋にちなんでつけられた。門の両脇にシーサーが置かれている点では歓会門と同じだが、石造りの堀の上に木造りのやぐらを置いた日本の城郭でも見ることができる形をしている。平成4年(1992)復元



## 漏刻門

「かご居せ御門」とも呼ばれ、駕籠の使用を許されていた身分の高い役人もここで降りる慣わしがあったとされる。漏刻とは中国語で水時計を意味し、やぐらに水槽を設置し、水が漏れる量で時間を計りお城の内外に知らせたという。瑞泉門と同じく石造りアーチのない門となっている。平成4年(1992)復元



## 日影台

漏刻門の水時計の補助的な役目として使われ、十二支の刻まれた時刻盤（石の円盤）に銅製の棒を取り付け、太陽の動きとともに移動する影の位置から、時刻を計った日時計。往時は二十四節季に基づいて角度を変更していたが、現在は春分・秋分・夏至・冬至の年4回変更している。平成12年(2000)復元



## 万国津梁の鐘

日影台のそばに万国津梁の鐘を納めた供屋がある。この鐘は当時首里城正殿に掲げていたといわれ、東南アジア諸国、日本、朝鮮、中国との中継貿易で栄えた琉球王国をたたえる銘文が刻まれている。「万国津梁」とは「世界の架け橋」という意味で、その存在感の大きさを伺わせる内容となっている。展示されている鐘はレプリカだが、本物も沖縄県立博物館・美術館で観覧することができる。平成12年(2000)復元



## 広福門

広福とは福を行き渡らせる意味で、木造平屋建・入母屋造・本瓦葺の朱塗りと赤で統一された建物で、建物自体が門の機能をもつ。当時は役所としての機能を担っており、士族の財産をめぐる争いを調停する「大与座」と、神社仏閣を管理する「寺社座」があった。現在は券売所等に利用されている。平成4年(1992)復元



## 下之御庭

首里城正殿のある御庭の手前にある広場で、かつては御庭の行事参加者の待合所になっていたとされる。現在は首里城祭や百人御物参など、城内のイベント等で利用されている。庭の西側には家譜を保管して琉球の歴史書などを編集した役所「系図座」や、城内で使われる筆・紙・墨などの日用品や物品、中国や薩摩藩、江戸幕府などへの貢物を管理した「用物座」がある。両座は平成4年(1992)復元





# 沖縄の伝統工芸



©OCVB

## ●焼物

沖縄では陶器のことを「やちむん」という。12世紀頃から海外の陶磁器が輸入され、14～16世紀頃には琉球王国が海外貿易を盛んに行っていた。沖縄で陶業が盛んになったのは慶長14年(1609)に薩摩が琉球を侵略し、海外との交易が下火になると、その事を危惧した琉球王国の尚貞王は産業振興の目的で薩摩から朝鮮の陶工(一六、一官、三官)を招き、湧田(現在的那覇泉崎・県庁がある付近)で陶器を作らせた。南方や中国からの陶法と朝鮮式の陶法がミックスされ、後に現在の沖縄の陶法「壺屋焼」が誕生したのである。一時下火になった壺屋焼だが、大正時代に起こった民藝運動によって知名度が日本全土に広がり、注目されるようになった。その温かみとずしりとした重量感がある壺屋焼は沖縄の豊かな自然風土を写し取った焼物と称されている。そのほか沖縄では壺屋焼以外にも古我地焼、読谷山焼(ゆんたんざやまゆ)、知花焼、涌田焼など土地由来の名のついた焼き物がある。



## 珍しい焼物

### ●シーサー

沖縄に古くから伝わる伝説の獣神で、獅子のことをシーサーと呼称し、町や村の入口や家屋の屋根の上に飾る。風水の思想に基づき午(南)の方角へシーサーを向けると火災の防止に、丑寅(北東)の方角へ向けると台風から家を守る水難防止になると伝えられている。その置き方は開口が勇ましいことから「雄」、閉口が「雌」とされている。

古代オリエントの獅子(ライオン)像が中国を経由し、沖縄へと伝わったと推測されており、シルクロードで次々に姿や形を変えながら実際のライオンを知らない地域に伝わったことで、どんどん霊獣化して魔よけや守り神となったと考えられている。ちなみに沖縄は中国から伝わったのに対し、本土は朝鮮半島から伝わったため神社は「狛犬」となったといわれている。

©OCVB



©OCVB



## ●琉球漆器

沖縄では漆器のことを「琉球漆器」といい、起源は14世紀末ごろに中国から入ってきたと言われている。15～16世紀になると琉球漆器は盛んに製作され、16世紀にすでに高度に発達した琉球独自の漆芸品をつくっていたとされる。沖縄の温暖な気候と湿度が漆を乾燥させるのに適した環境であったことや、デイゴ、シタマキ(エゴノキ)など良質な素材が豊富であったことで高品質な漆器を生み出したのである。漆器は政治と信仰の結びつきが強い琉球地域では、祭祀や儀式で漆の装飾品や首飾り玉などを使用され、人と神を結ぶ儀礼の場所で使用されたが、外国との交流が深まると中国、タイ、マレーシアへの献上品としても使われた。薩摩藩により徳川家康に献上されたという記録も残っているという。

琉球漆器は主に5つの技法があり、彫った線に金箔や銀箔をあて模様を描く「沈金」、漆で模様を描いた上に金箔を置き、乾いたあとにぬぐって模様の部分だけに箔を残す「箔絵」、うすく削った貝を模様の形に切って器に貼る「螺鈿」、油などに顔料を混ぜて文様を描く「密陀絵」、顔料と漆を練り合わせたものを模様に切りぬいて器に張りつける琉球漆器独自の技法「堆錦」。時代とともにこれら技法を取り入れた作品は移り変わっているが、王朝文化の華として発展した、この伝統工芸技術は平成3年(1991)に県の県指定無形文化財・工芸技術となっている。

## 漆とは

漆はウルシ科ウルシ属の落葉高木からとれる樹液。素材の腐朽を防ぎ、酸やアルカリにも強いいため、木製品などを長持ちさせる優れた性質をもつ。日本ではほとんど採取はされておらず、原産国の中国から輸入している。樹液の成分にはウルシオールという物質があり、触れるとそれが刺激物となって皮膚に炎症を引き起こすことがある。樹齢10～20年に達した木を削り、樹液を採取、異物をろ過して精製する。漆は作品に塗ったあと乾くのではなく、ある温度と湿度によって活性化し、空気中の酸素と反応することで液体から固体に変化する。高温・乾燥状態ではない沖縄の亜熱帯気候がうってつけである。

©OCVB



索引

名称	地図	沖縄県住所とアクセス所要分(那覇空港発 車の利用時)	
安慶名闘牛場(あげな)	P5B3	うるま市字安慶名1076	約50分
安波ダム(あは)	P6C2	国頭郡国頭村字安波川瀬原	約180分
安波のサキシマスオウノキ(あは)	P6C2	国頭郡国頭村安波	約180分
安波のタナガーグムイの植物群落(あは)	P6C2	国頭郡国頭村安波	約180分
アマミチューの墓	P5C3	うるま市勝連比嘉	約80分
アメリカンビレッジ	P5A3	中頭郡北谷町美浜	約45分
新川ダム(あらかわ)	P6C2	国頭郡東村字高江高高原	約160分
糸数アブチラガマ(いとかず)	P4B3	南城市玉城字糸数	約40分
糸数城跡	P4B3	南城市玉城字糸数	約40分
伊波城跡(いは)	P5B2	うるま市石川伊波	約60分
浦添市美術館(うらそえ)	P4B2	浦添市仲間1-9-2	約25分
運天原サバヤ貝塚(うんでんばる)	P6B3	名護市運天原	約110分
荻堂貝塚(おぎどう)	P5B4	中頭郡北中城村	約45分
沖縄アウトレットモールあしびなー	P4A3	豊見城市豊崎1-188	約20分
沖縄県 県民の森	P5C1	国頭郡恩納村字安富祖2028	約80分
沖縄県総合運動公園	P5B4	沖縄市比屋根5-3-1	約50分
沖縄コンベンションセンター	P4B1	宜野湾市真志喜4-3-1	約30分
オリオンビール工場	P6B3	名護市東江2-2-1	約80分
海中道路	P5C3	うるま市与那城	約80分
垣花城跡(かきのはな)	P4C3	南城市玉城字垣花和名盤	約45分
兼久海浜公園(かねく)	P5A3	嘉手納町字兼久85-31	約60分
茅打パンタ(かやうち)	P6C1	国頭郡国頭村宜名真	約180分
カナナ崎	P5C4	うるま市勝連平敷屋	約80分
漢那ダム(かんな)	P5C1	国頭郡宜野座村字漢那地先	約70分
喜如嘉の七滝(きじょか)	P6C2	国頭郡大宜味村字喜如嘉	約130分
喜屋武岬(きやみみさき)	P4A4	糸満市字喜屋武	約40分
金城町石畳道(きんじょうちよう)	P4B2	那覇市首里金城町	約20分
金武ダム(きん)	P5C2	国頭郡金武町金武	約70分
金武町(きんちよう)	P5C2	国頭郡金武町金武	約65分
久高島(くたかしま)	P4C4	南城市知念久高、安座真港まで約50分、高速船で15分	
倉敷ダム	P5B3	うるま市石川楚南879-1	約55分
慶佐次湾のヒルギ林(げさしわん)	P6B3	国頭郡東村慶佐次	約130分
国際通り	P4A2～B2	那覇市牧志 3-2-10 てんぶす那覇3階(那覇市国際通り商店街振興組合)	約15分
国立劇場おきなわ	P4B2	浦添市勢理客4-14-1	約15分
米須貝塚(こめす)	P4B4	糸満市米須	約40分
残波岬(ざんば)	P5A2	中頭郡読谷村字座	約80分
島添大里城跡(しましーおおざと)	P4B3	南城市大里大里	約30分
謝花昇(しゃはなのぼる)	P4B3	島尻郡八重瀬町東風平運動公園内	約30分
ジョン万次郎上陸之地	P4B4	糸満市大度海岸	約40分
白梅之塔(しらうめ)	P4A4	糸満市字真栄里	約30分
田港御願の植物群落(たみなとうがん)	P6B3	国頭郡大宜味村	約120分
知念海洋レジャーセンター(ちねん)	P4C3	南城市知念字久手堅676	約55分
知花城跡(ちばな)	P5B3	沖縄市知花	約50分
那覇新港(なはしんこう)	P4A2	那覇市港町1-16-10	約15分
名護城跡(なんぐすく)	P6B3	名護市名護5511	約90分
21世紀の森公園	P6A3	名護市宮里2-1	約80分
野国総管宮(のくにそうかんくう)	P5A3	中頭郡嘉手納町嘉手納	約60分
東村村民の森つじエコパーク(ひがしせん)	P6C3	国頭郡東村字平良766-1	約130分
比地大滝(ひじおおたき)	P6C2	国頭郡国頭村 字比地781-1	約140分
備瀬のフクギ並木(びせ)	P6A3	国頭郡本部町備瀬	約120分
辺戸岬(へと)	P6C1	国頭郡国頭村辺戸	約180分
辺野喜ダム(へのき)	P6C2	国頭郡国頭村辺野喜114	約170分
平安名貝塚(へんな)	P5C3・C4	うるま市勝連平安名	約70分
八重瀬町戦争遺跡公園(やえせちよう)	P4B3	島尻郡八重瀬町字新城	約30分
ヤンバルクイナ展望台	P6C1	国頭郡国頭村字辺戸	約180分
琉球ガラス村	P4A4	糸満市字福地169	約30分

問い合わせ先

名称	電話番号(098)	名称	電話番号(098)
国頭村観光協会	041-2420	西原町観光まちづくり協会	862-1442
東村観光推進協議会	051-2655	うるま市観光物産協会	989-1148
大宜味村観光協会	050-5707	北中城村観光協会	923-5888
本部町観光協会	047-3641	中城村観光協会	975-5309
名護市観光協会	053-7755	浦添市観光協会	874-0145
今帰仁村観光協会	056-1057	那覇市観光協会	862-1442
恩納村観光協会	966-2893	豊見城市観光協会	856-8766
金武町観光協会	989-5674	南風原町観光協会	851-7273
宜野座村観光協会	968-8787	南城市観光協会	948-4660
読谷村観光協会	958-6494	八重瀬町観光物産協会	998-3300
嘉手納町観光協会	989-5353	糸満市観光協会	840-3100
北谷町観光協会	926-5678	(一財)沖縄観光コンベンション ビューロー教育旅行チーム	859-6129
宜野湾市観光振興協会	897-2764		
沖縄市観光物産振興協会	989-5566		

写真協力：一般財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー、おきなわワールド、ガンガラーの谷、  
漫湖水鳥・湿地センター、首里染織館suikara、一般財団法人 沖縄美ら島財団、東南植物楽園、  
恩納村博物館、ユンタンザミュージアム、名護博物館、やんばる野生生物保護センター ウフギー自然館、  
大石林山、東村立 山と水の生活博物館、JAMSTEC(GODAC 国際海洋環境情報センター) ※順不同

※本誌は、2023年8月現在判明分の資料に基づき編集した最新版です。  
編集現在、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)等の影響で見学方法や時間などを臨時に変更し  
ている施設が多数ございます。ご注意ください。  
本書掲載の地図は、国土地理院発行の地形図をもとに作成いたしました。  
本書の記事、データ等の無断転載・複製をお断りします。©ユニプラン 2023

散策&観賞 沖縄本島編

第1版第1刷 定価 660 円(本体 600 円+税 10%)

発行日 2023年9月15日  
編集スタッフ 橋本 豪 ユニプラン編集部  
デザイン 岩崎宏  
発行人 橋本良郎  
発行所／株式会社ユニプラン

〒601-8213 京都府京都市南区久世中久世町 1-76

TEL. 075-934-0003

FAX. 075-934-9990

振替口座／01030-3-23387

印刷所／株式会社プリントパック

ISBN978-4-89704-582-5 C2026